

論 文

長岡高専生の受容語彙サイズの測定とその特徴

茅野 潤一郎

一般教育科—英語(Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

MEASUREMENT AND CHARACTERISTICS OF THE RECEPTIVE VOCABULARY SIZE OF JAPANESE EFL STUDENTS AT NAGAOKA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY

Junichiro CHINO

Abstract

To give an effective vocabulary class or to improve the vocabulary ability of EFL learners, it is necessary to measure their vocabulary size accurately first of all. The purpose of this research is to investigate the receptive vocabulary size of the first to third year students at Nagaoka National College of Technology and to describe its characteristics. The subjects were 246 Japanese students at NNCT, who took the vocabulary size test which was thought to be the most appropriate at the time. The same test was given to 192 students at a high school in order to draw a parallel between those two schools. The results showed that the average receptive vocabulary size of the first to third-year students was about 1900, 2690, and 2650 words respectively, and that there was no statistically significant difference between the second and third-year students.

Key Words: *receptive vocabulary, vocabulary size, vocabulary learning, college of technology, high school*

1. 研究の背景

1.1 研究の動機

語彙は第2言語(L2)の熟達度を示すもっとも信頼できる指標のひとつであり(望月,1998)¹⁾、英語の4技能(聴く・話す・読む・書く)を伸ばす上で欠かせないのが語彙力である。授業中に教師は語彙力の必要性を説き、学生も、英語の好き嫌いに関わらず語彙力の重要性を認識している。語彙数を増やすために毎週単語の小テストがおこなわれ、定期考査で学習した語彙が再度出題される。このように、語彙力の必要性は誰もが認識しているものの、実際に自分の語彙レベルを知っている者はほとんどいない。学生は、明確な指標のないまま、語彙学習を続けているのが現状である。

はたして、学生はどの程度の語彙数があるのだろうか。

また、どのレベルの語を学習する必要があるのだろうか。

1.2 受容語彙と発表語彙

語彙力と言っても、その見方は様々であり、どの程度のレベルの語彙力を測定するかによって結果は大きく異なる。Nation(1990)は「受容的知識(receptive knowledge)」と「発表的知識(productive knowledge)」という概念を提唱した²⁾。受容的知識とは、発音を聞いたり綴りを見たりして、その語の意味が分かることを指す。発表的知識とは、ある意味に対して適切な単語を使用することを意味する。

語彙知識の状態は、受容語彙から発表語彙に至る連続体を構成していると考えられており、望月・相沢・投野(1993)は先行研究を概観し、図1のように図式化した³⁾。

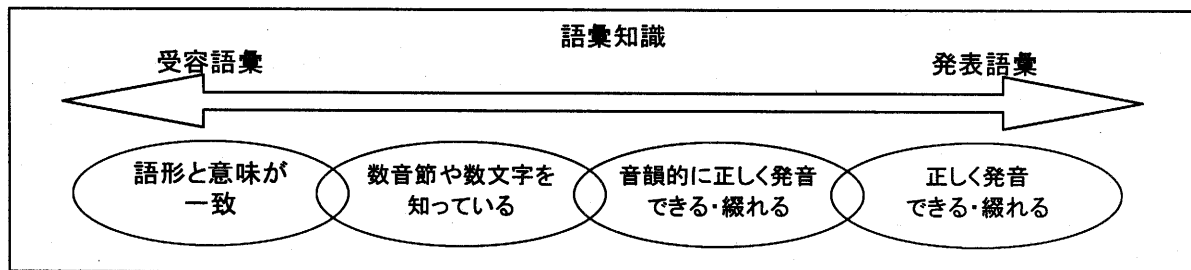


図1 受容語彙から発表語彙への変化(望月・相沢・投野,1993:84)

このように、受容語彙と発表語彙は二項対立的な概念ではなく、完全に別個のものとして扱うことはできないが、まず初めに本研究では受容語彙としての語彙習得数に焦点を当てて測定する。つまり、ある英語の単語のインプットを受けた時にその意味が分かる語彙がどのくらいあるかという量について測定する。したがって、本研究では、知っている語をどの程度用いることができるか、という発表的側面については取り扱わない。

1.3 L2 語彙習得過程

次に、語彙力という概念を語彙の習得過程という観点から見る。Hatch and Brown(1995)は、L2 語彙習得過程を、図2のように一連のふるいに見立てて、5段階に分類した⁴⁾。

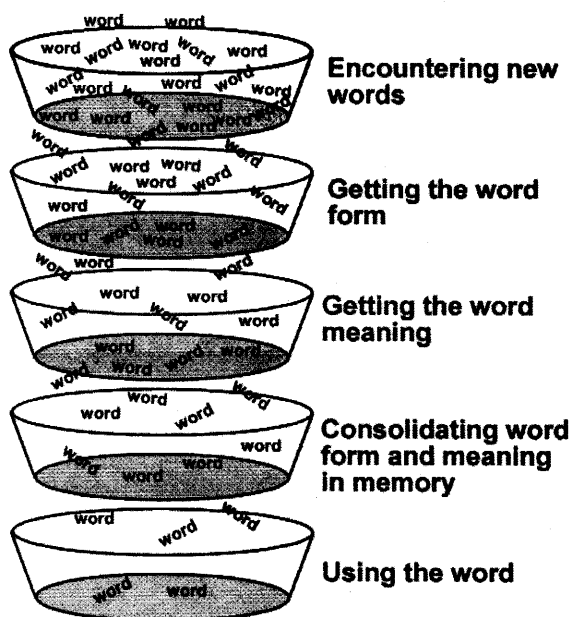


図2 L2 語彙習得モデル(Hatch and Brown, 1995:374)

第1段階：新しい語に出会う(encountering new words)ためのソースを得る。

第2段階：語形を理解する(getting the word form)ために、視覚的・聴覚的に語の形の明確なイメージをつかむ。

第3段階：語の意味を学習する(getting the word meaning)

第4段階：記憶内にある語形と意味を統合する(consolidating word form and meaning in memory)。

第5段階：語を使ってみる(using the word)

このモデルによれば、大雑把に第4段階に進むまでの過程が受容語彙として、また、第5段階が発表語彙として分類することが可能であるが、望月・相沢・投野(2003:77)が指摘するように、実際には語彙習得はこのモデル通りに進行するわけではなく、その単語を使用する経験によって、より受容語彙としての定着が期待される³⁾こともあり、語彙習得の場面では単語を使用してみるという活動も取り入れなければならない。

1.4 語彙数の計算法

何を1語と見なすかという定義の方法によって測定結果は大きく異なる。一般的にはワードファミリー方式と派生形方式の2つがある。ワードファミリー方式は基本形方式とも呼ばれ、例えば、happy, happiness, happily, unhappy という4語は全てhappyというヘッドワードのワードファミリーとして1語と数えられる。派生形方式は屈折形や派生形をそのままの形で1語とみなす。中学校学習指導要領で明記されている語彙数約900語は派生形方式である。このように、語彙サイズを測定する場合には、その計算方法を明確にする必要がある。

1.5 語彙力

学習者の語彙力については、サイズ(どれだけ多くの語を知っているか)、知識の深さ(1つの語をどれだけよく知っているか)、認知速度(どれだけ早く1つの語を使えるか)の3通りの観点から捉えることができるが、これらすべてを同時に満たす測定方法は確立されていない(望月・相沢・投野,2003:181)³⁾。そのため、本研究では、これらのうち、「語彙サイズ」に焦点を当て、学習者がどれだけ多くの語を知っているかという点から測定する。

2. 研究目的

本研究の目的は、長岡高専に在籍する学生の受容語彙サイズを、日本人 EFL 学習者にとって最善と考えられるテストを使用して調査し、主に以下の点を検証することである。

- ① 各学年の平均受容語彙サイズと語彙レベル別の正答数の平均
- ② 学年間の平均受容語彙サイズと語彙レベル別の正答数の平均の差
- ③ 他の高校と比較した場合の平均受容語彙サイズと語彙レベル別の正答数の平均の差

3. 研究方法

3.1 被験者

長岡高専に在籍する、1年生から3年生までの学生246人(高校生に相当する学年を対象とした。また、留学生は集計から除外した)、および、新潟県立A高等学校総合ビジネス科1年生79人、国際教養科2年生75人、国際教養科3年生38人。なお、長岡高専では各学年5学科あり、学科間の学力差があることが想定され、本来であれば全学科を対象にすべきであるが、日程的な制約もあり、今回は一部の生徒を対象とした。A高校における被験者の選択方法も同様の理由によるものである。

3.2 語彙サイズテストの選定

学習者の語彙サイズを測定する時、全ての単語につ

いて知っているかどうか質問することは不可能であり、ある一定の割合の語を全体の標本として抽出する必要がある。その場合、一般的には何らかの語彙頻度に準拠し、テストを作成する(投野, 編, 1997:124)⁵⁾。また、過去に提案された語彙サイズテストのうち、どのテストを用いるかという点を十分考慮しなければならない。本研究では以下の3つのテストを比較した。

(1) 語彙レベルテスト (Nation, 1990)

Nation(1990:261-272)で紹介されている語彙レベルテスト(Vocabulary Levels Test: VLT)は、2000語レベルから10000語レベルの5つのレベルから成る²⁾。各レベルとも、6つのセクションがあり、各セクションごとに3つの定義と6つの単語の選択肢があり、受験者はそれぞれの定義に最適な単語を選択する。各セクションにつき18語出題される。

VLTは合計90問しかなく、短時間で実施できるのが利点であるが、単語の定義が英語で書かれているため、学習者のレベルによっては単語の意味を認識するよりも、定義の内容を理解する用が難しいことも想定される。また、VLTはワードファミリー方式で計算しているため、もともとレベルの低い2000語レベルであっても、派生形換算ではさらに多くの語彙をテストしていることになる。このように、日本人高校生を対象にテストするにはVLTは適しているとは言えない。

(2) 語彙サイズテスト(望月,1998)

望月(1998)が提唱した語彙サイズテスト(Vocabulary Size Test, VST)は1000語から7000語までの7レベルで構成され、各レベル30語が出題される。単語2語を1セットとし、各セットに6語の日本語の選択肢が与えられる。望月(1998)はこのテストを作成するにあたり、その基礎となる語彙表として、北海道大学英語基本語彙表(北大語彙表)を選定した。北大語彙表は15000語におよぶ12種類の語彙表をデータベースにし、Timeのテキスト900万語、米国環境庁の科学文献抄録集(270万語)のコーパスの頻度情報をもとに、7420語を選定したものである(望月,1998:38)。VSTがVLTと異なる点は、①派生形方式で計算していること、②選択肢が日本語で与えられており、また、1000語レベルのテストがあり、初級者の語彙サイズを測定することが可能であること、が挙げられ

る。

VST の問題点として、八島(2002)は、当て推量による正答数の増加が語彙サイズに影響を及ぼす点を指摘している⁶⁾。つまり、1 問につき 6 つの選択肢が与えられており、6 分の 1 の確率で正答する。各レベルとも、1000 語につき 30 問が抽出されて出題されており、5 問は当て推量で正答することができる。また、1 問正解すると 33.3 語の語彙数があると判定される。このため、例えば、全く英語を学習したことのない者でも、7000 語レベルまで全て勘や当て推量で解答すると、語彙サイズは 1166.6 語であると判定される可能性がある。VST を用いて高校生の語彙サイズを調査した八島(2002)は、12 月時点での高校 1 年生平均語彙サイズは 2900~3100 語であったと報告した⁶⁾。学習指導要領では中学校で約 900 語、高校 1 年(英語 I)で 400 語程度を学習すると記述されており⁷⁾、八島が報告した高校 1 年生の平均語彙サイズに到達するにはさらに 1600 語の学習が必要であるが、これは現実的ではない。このように、VST では、勘や当て推量により、実際の語彙サイズよりも 1000 語以上高い数値が算出される可能性がある。

(3) 語彙サイズ推定テスト(八島, 2005)

八島(2005)は、『JACET8000』のレベルに基づき、1000~4000 語レベルを測定する語彙サイズ推定テスト(Estimated Vocabulary Size Test: EVST)を開発した⁹⁾。単語は単独提示式で、1 つの日本語の語義に対して 3 つの英語が与えられる。このテストでは、当て推量によって語彙サイズが大きくなってしまふことを避けるために次のような手法が採用されている。①各レベルとも 100 語が出題される。つまり、前述の VST が出題される 1 語あたり 33.3 語の重みを持つものに対し、EVST では 1 語あたり 10 語である。②見当がつかない場合には無理に回答しないで空欄のままにしておくように、という指示を与えた。③当て推量や消去法で回答した場合にはそれぞれ O、△を記入させ、推量で正解した場合は 0.33 を、消去法の場合は 0.67 を掛けた。八島はこれらの手法により、VST よりも偶然による正解の可能性を下げるできると期待される、と述べている。

このように EVST では多くの改良が試みられているものの、問題点が残されている。言語テストは信頼性、妥当性、実用性という 3 つの観点から捉えることができる

(Weir, 1993)¹⁰⁾が、EVST は実用性という点で VST に劣る。4000 語レベルまで測定した場合、VST では 120 語が出題されるのに対し、EVST では受験者は 400 語の問いに解答しなければならない。さらに、単に解答するだけでなく、推量や消去法で答えた場合には記号も付さなければならない。そのため、テストを実施するにはある程度まとまった時間が必要になる。さらに、VST では、比較的簡易に語彙サイズが算出されるため、試験後、学習者自らが採点し、事後の学習への指針とすることが可能であるのに対し、EVST では採点により多くの時間が必要となり、また、計算方法がより複雑になり、実用性に問題が残る。八島は、実際にテストをおこなった時の所要時間を明記していない。高等学校の平均的な授業時間を 50 分とすると、受験者は 1 授業時内でテストをするには 1 問につき 7.5 秒の割合で解答しなければならない、実際には 1 授業時で実施するのは現実的には難しいと推察される。

(4) まとめ

以上のことから、本研究では現時点で最善と考えられる VST を使用する。EVST を採用しなかったのは、実用性に関する問題点が消えないことによる。また、VST の問題点として挙げた、当て推量による語彙サイズの増大という問題点については、八島(2005)の手法を参考にし、「見当がつかない場合には無理に解答せず、空欄のままにすること」という指示を与える。このため、VST を採用した他の研究のデータよりも平均語彙サイズは低くなるが、学習者の実態に合う本来の語彙サイズに近い数値が算出されると予想される。また、VST では 7000 語レベルまでの測定が可能であるが、被験者のレベルを考慮し、6000 語レベルまでのテストを使用する。各レベル 30 問、計 180 語が出題される。

3.3 研究手順

本研究の手順は以下の通りである。

- ① 2005 年 7 月に VST を長岡高専生に実施し、各学年の平均語彙サイズを算出する。
- ② 一元配置の分散分析により学年間の平均語彙サイズに有意差があるかどうか検定する。
- ③ 語彙レベル別に正答数の平均値を算出する。一元配置の分散分析により学年間で語彙レベル別正答数の平均値に有意差があるかどうか調べる。

- ④ 2005年7月に新潟県立A高校に実施し、t検定により、長岡高専生とA高校生の各学年の平均語彙サイズに有意差があるかどうか調査する。
- ⑤ t検定により、各学年ごとに学校間で語彙レベル別正答数の平均値に有意差があるかどうか調べる。

4. 結果

4.1 長岡高専生の語彙サイズ

1年生の平均語彙サイズは1902語、2年生は2689.6語、3年生は2648.8語であった(表1)。学年間の平均語彙サイズを一元配置の分散分析により検定した結果、要因の効果に0.1%水準で有意差が見られた($F(2,243)=52.808, p<.001$)。さらに、Tukey HSDの多重比較により、1,2年生及び1,3年生の間で5%水準で有意差があったが、2,3年生の間では有意な差はなかった(表2)。

表1 平均語彙サイズ(長岡高専生)

	1年生 (N=83)	2年生 (N=83)	3年生 (N=80)
Mean	1902.0	2689.6	2648.8
SD	413.3	555.5	669.3

表2 学年間の平均語彙サイズの多重比較(Tukey HSD)

	1年生	2年生	3年生
1年生	-	787.6*	746.7*
2年生		-	40.8
3年生			-

4.2 長岡高専生の語彙レベル別の平均正答数

表3及び図3が示すように、1000語レベルでは、どの学年もほぼ全ての語に正答できた。しかし、2000語レベルでは、2,3年生が6割以上正答しているのに対し、1年生の正答数は半数を下回った。また、3000語レベルになると2,3年生でも正答数が半数を下回った。

次に、各語彙レベルごとに学年間の正答数の平均値の差を一元配置の分散分析により分析した結果、以下のようになった。

- ① 1000語レベル:5%水準で要因の効果に有意差が見られた($F(2,243)=7.81$)。また、多重比較の結果、1,2年生間で1%水準で有意差が見られたが、他では有意差がなかった。

表3 語彙レベル別平均正答数(長岡高専生)

Level		1年生 (N=83)	2年生 (N=83)	3年生 (N=80)
1000	Mean	28.07	29.08	28.64
	SD	1.88	1.53	1.52
2000	Mean	13.22	18.84	18.58
	SD	3.87	4.02	4.71
3000	Mean	7.94	13.47	13.50
	SD	3.41	3.54	4.61
4000	Mean	4.53	8.72	9.99
	SD	3.46	4.18	4.83
5000	Mean	1.48	5.83	4.86
	SD	2.20	4.38	4.51
6000	Mean	1.82	4.73	3.91
	SD	1.84	3.31	4.25

(maximum score:30)

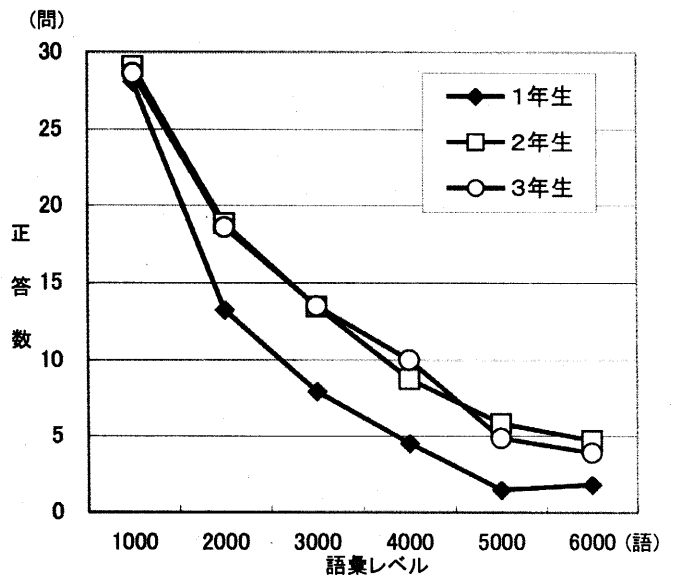


図3 学年間の語彙レベル別正答数比較(高専生)

- ② 2000語レベル~6000語レベル:1%水準で要因の効果に有意差が見られた(2000語から順に: $F(2,243)=46.91, F(2,243)=61.34, F(2,243)=38.27, F(2,243)=29.30, F(2,243)=17.49$)。また、多重比較の結果、いずれのレベルにおいても、1,2年生間、1,3年生間で1%水準で有意差が見られたが、2,3年生間では有意差がなかった。

4.3 長岡高専とA高校との語彙サイズの平均値の差

同一学年の平均語彙サイズを長岡高専とA高校との間で比較した結果(表4)、1年生では、学校間に有意差は見られず、一方、2年生と3年生では0.1%水準で有意

差が見られ、平均値の差は2年生で約400語、3年生は約800語であった。

表4 同一学年の学校間の平均語彙サイズ比較

	N	Mean	SD	t
1年生 長岡高専	83	1902.0	413.3	t(160)
A高校	79	1862.4	417.3	=.606 (n.s.)
2年生 長岡高専	83	2689.6	555.5	t(156)
A高校	75	3088.0	580.4	==4.408***
3年生 長岡高専	80	2648.7	669.3	t(116)
A高校	38	3464.9	552.3	==6.53***

4.4 長岡高専とA高校との語彙レベル別の平均値の差

各学年ごとに、語彙レベル別に2校を比較した結果、下の表5-7のようになった。

1年生では、1000語及び2000語レベルにおいて高専生の平均値の方が有意に上回ったものの、3000語及び5000語レベルでは有意に下回り、4000語及び6000語レベルでは有意差は見られなかった(表5)。

2年生では、1000語・5000語・6000語レベルでは有意差は見られなかった。一方、2000語・3000語・4000語レベルでは高専生の平均値はA高校のそれを有意に下回った(表6)。

3年生では、6000語レベルでは有意差は見られなかったものの、それを除く全てのレベルで平均値の差は有意であり、高専生はA高校生を下回った(表7)。

5. 考察

5.1 長岡高専生の学年間の語彙サイズの比較

1年生の平均語彙サイズは約1900語であることが判明したが、この数値は、中学校で約1000語を学習し、高専入学後、テキストや単語帳(*Word Navi 1800*¹¹⁾)で学習した語彙数を加算すると、妥当な数値であると思われる。前述のように、八島(2002)は高校1年生の平均語彙サイズは約3000語であると報告した⁶⁾が、本研究では、被験者に「見当がつかない場合には無理に解答せず、空欄のままにする」という指示を与えた結果、当て推量による正答が減り、実態に近い数値となったと言える。

2年生の平均語彙サイズは約2690語、3年生のそれは2650語であり、多重比較の結果、統計的な有意差は

表5 語彙レベル別平均正答数 (1年生)

Level		長岡高専 (N=83)	A高校 (N=79)	t(160)
1000	Mean	28.07	26.99	3.372**
	SD	1.88	2.21	
2000	Mean	13.22	11.77	2.300*
	SD	3.87	4.13	
3000	Mean	7.94	9.32	-2.384*
	SD	3.41	3.93	
4000	Mean	4.53	4.59	.752 (n.s.)
	SD	3.46	3.24	
5000	Mean	1.48	3.31	-2.164*
	SD	2.20	2.24	
6000	Mean	1.82	3.17	1.387(n.s.)
	SD	1.84	1.74	

(maximum score:30)

表6 語彙レベル別平均正答数 (2年生)

Level		長岡高専 (N=83)	A高校 (N=75)	t(156)
1000	Mean	29.08	29.51	-1.831(n.s.)
	SD	1.532	1.349	
2000	Mean	18.84	22.31	-5.901***
	SD	4.017	3.276	
3000	Mean	13.47	17.40	-6.732***
	SD	3.542	3.795	
4000	Mean	8.72	11.55	-3.951***
	SD	4.180	4.802	
5000	Mean	5.83	7.23	-1.735(n.s.)
	SD	4.378	5.701	
6000	Mean	4.73	4.65	.118(n.s.)
	SD	3.310	5.524	

(maximum score:30)

表7 語彙レベル別平均正答数 (3年生)

Level		長岡高専 (N=83)	A高校 (N=38)	t(116)
1000	Mean	28.64	29.58	-3.588***
	SD	1.520	.793	
2000	Mean	18.58	24.47	-7.271***
	SD	4.717	2.379	
3000	Mean	13.50	20.13	-8.432***
	SD	4.161	3.603	
4000	Mean	9.99	15.42	-5.517***
	SD	4.827	5.346	
5000	Mean	4.85	11.63	-6.492***
	SD	4.509	6.688	
6000	Mean	3.91	2.71	1.419 (n.s.)
	SD	4.249	4.405	

(maximum score:30)

見られなかった。つまり、2年生と3年生の語彙サイズの違いはないことが分かった。本研究では学年内の全ての生徒を被験者に含んでおらず、入学年度による学年間の学力差も考慮に入れていないため、早急に結論づけることはできないが、2年生が1年生に比べて800語近く語彙数が多いのは、1つの要因として、毎週実施している単語テストが有効に機能していることによるものと考えられる。2年生は調査時点の7月まで *Word Navi 1800* を用いており、生徒が真剣に取り組んだ結果、語彙数の増加につながったと推察される。

一方、2年生では後期より、レベルの上がった *Word Navi 3300*¹²⁾ を使用して単語テストをおこない、語彙力の増強を図っているが、2年生と3年生の語彙サイズが変わらないという理由の一因として、この *Word Navi 3300* が有効に機能していないという可能性が考えられる。その原因を突き止めるには、2年生の平均語彙サイズの数値が妥当であるかという点も含め、さらに詳細な調査が必要になるが、今後、生徒のモチベーションの差、単語帳の構成、単語テストの実施方法、フィードバックの必要性などの問題を探る必要があるだろう。

5.2 長岡高専生の語彙レベル別の習得状況

2年生と3年生はどのレベルにおいても学年間に統計的に有意差は見られず、ほぼ同様の傾向であると言える。一方、1年生と、2,3年生との間で大きく異なる点は、2000語及び3000語レベルである。1000語レベルから順に見ると、1年生は2000語レベルで正答率50%を下回ったが、2,3年生が正答率50%に届かなかったのは3000語レベルであった。これより、1年生は1000語レベルの語はほぼ完全に習得しているが、2000語レベルではまだ習得していない語の方が多く、3000, 4000語レベルでは知らない単語が大半を占め、5000語レベル以上はほぼ全く知らないと言える。2,3年生は、1000語レベルの語はほぼ完全に習得しており、2000語レベルでは過半数の語を習得しているが、3000, 4000語レベルでは知らない単語が半数以上となり、5000語以上では知っている語はかなり少ないと言える。

5.3 長岡高専生とA高校との語彙サイズの比較

本研究の被験者であるA高校1年生は、学力全般には県内の高校では中間的なレベルであると思われる。

今回、このような生徒と長岡高専1年生を比較した結果、有意差は見られず、したがって、1年生の段階では、語彙サイズに顕著な差は見られないと言える。一方、2年生及び3年生では語彙サイズの平均値に有意差が見られ、長岡高専がA高校を下回った。しかし、A高校の2,3年生の被験者は国際教養科に所属しており、一般に英語に対する関心が高く、カリキュラム上においても普通科や他の学科に比べて英語の時間数が多い。また、大半の生徒が四年生大学への進学を希望する。そのため、A高校2,3年生の語彙サイズの平均値は他の高校と比較しても高いと予想され、今回算出された数値はある意味当然とも言える。

ここで、A高校の平均語彙サイズに注目すると、3年生の語彙サイズの平均値は2年生のものよりも約380語多い。一方、前述のように、長岡高専では、2年生と3年生の語彙サイズの違いはなかった。つまり、A高校では学年が上がるにつれ、順調に語彙数を増やしていくと見られるのに対し、長岡高専では2年生から3年生にかけて語彙数の増加が見られない。これは、一般的に進学校と呼ばれる高校では大学受験にそなえて勉強することにより、語彙サイズが順調に増加していくのに対し、高専では大学受験に囚われることがないため、2年生から3年生にかけて語彙サイズの増加に関して停滞傾向が生じることによるものであると推測される。

また、語彙レベル別にA高校と比較すると、長岡高専1年生は、2000語レベルまでは習得語彙数が多いものの、3000語以上ではA高校と同じであるか、下回った。2000語レベルで平均正答数が有意に上回ったとはいえ、正答率は50%以下であり、今後の指導としては、2000語レベルを重点的に習得させ、同時に3000語レベルの語彙にも触れさせることが必要であろう。

長岡高専2年生では、前述のように、1000語レベルについてはほぼ満点を取り、A高校と有意な差がなく、したがって、1000語レベルの語は習得していると見られる。しかし、2000~4000語については、A高校との間に有意差が見られ、また、5000語以上では両校とも得点は低く、有意差も見られなかった。これらのことから、長岡高専2年生は今後2000~4000語の語彙を重点的に増やす必要がある。

3年生に関しても、2年生と同様の傾向が見られるが、注目すべきものとして、5000語レベルの平均値が挙げら

れる。長岡高専3年生は約5問(17%)しか正解しなかったのに対し、A高校3年生は約12点(40%)正解し、その差は有意であった。6000語レベルでは両校とも3点(10%)前後しか得点していないことを合わせて考えると、A高校3年生は語彙サイズを順調に増やし、その習得可能領域が5000語レベルまで及んでいるのに対し、長岡高専3年生では、3000~4000語レベルの語を習得している過程にあり、したがって、5000語レベルの語も視野に入れつつ、3000語レベル以上の語を増やす必要がある。

6. 結論と教育上の示唆

本研究では、被験者を無作為に抽出しておらず、対象となった両校とも、学科間の学力差などを考慮に入れていないため、今回の学年間の比較や学校間の比較の結果を一般化することには注意が必要である。しかし、今回使用したVSTによる語彙サイズ調査の結果、長岡高専生の受容語彙サイズに関して以下の特徴が明らかになった。

- ① 受容語彙サイズ: 平均は1年生で約1900語、2年生で2690語、3年生で2650語であり、2,3年生の平均語彙サイズには有意差はなく、2,3年生間では学年進行による語彙サイズに変化は見られなかった。
- ② 1年生: 平均語彙サイズは県内の平均的な高校と比べて差がない。語彙レベル別に見ると、2000語レベルで正答率が50%以下になる。また、3000語レベル以上の習得状況を見ると、A高校を有意に下回る傾向が見られたことから、1年生では2000語レベルを重点的に習得させ、同時に3000語レベルの語彙にも触れさせることが必要である。
- ③ 2年生: 平均語彙サイズは県内の高校のうち、いわゆる「進学クラス」と比較すると有意に下回る。1000語レベルの語彙はほぼ習得している。2000語レベルの語彙は半数を習得しているものの、2000~4000語については、A高校との間に有意差が見られ、これらのことから、2年生では2000語レベルの語彙をさらに増やし、3000語~4000語レベルの語彙の習得を促す必要がある。

- ④ 3年生: 2年生と比較し、語彙サイズの増加に停滞傾向が見られる。そのため、語彙サイズを順調に増やしているA高校3年生の平均語彙サイズとの間の差が開いている。A高校ではその習得領域が5000語レベルまで及んでいるのに対し、長岡高専3年生では、3000~4000語レベルの語を習得している過程にある。したがって、3年生では2000語レベルの語彙の習得を継続し、その一方で5000語レベルの語彙に触れる機会を増やす必要がある。

Nation(1990)は先行研究をまとめ、英語母語話者は18歳の時点で17600語の受容語彙を習得していると記述している²⁾。しかし、EFL学習者として17000語もの語彙を習得することは現実的には非常に困難である。望月・相澤・投野(2003)は、コーパスを調査した結果、英語母語話者は最も頻度の高い500語で、会話の80%以上をカバーし、2000語で94%をカバーし、それ以上、10000語までカバー率は微増に留まると報告した³⁾。また、Nationも、最も頻度の高い2000語は学習者にとって非常に有益であり重要であると述べている(Nation, 1990:14)。したがって、まずは2000語の習得を目標にすべきであろう。これらの数字はワードファミリー方式であり、VSTなどで用いられている派生形方式に換算するとさらに増え、一般的には約2倍になると言われることから、今回の語彙サイズテストでは4000語の語彙を習得しているかどうかを1つの判定材料となる。つまり、3年生までに4000語の語彙を習得し、困難なく日常用いられる英語を読みとることができることを1つの達成基準をみなすことができる。この点から、長岡高専生の語彙サイズは満足できるレベルに到達しておらず、今後、語彙の一層の習得を促進させる手だてを講じなければならない。現在、どの学年においても、週1回の単語テストを実施し、また、定期考査で再度出題することにより語彙の定着を図っているが、学習者によっては他の手だてが必要かもしれない。例えば、英語学習へのモチベーションが低い学習者は毎週の小テストへの取り組みが不十分である。そのような場合、再テストを課すことが効果があるのか、それとも、小テストへの積極的な取り組みを促すために、毎日単語帳を開かせるような課題を課すべきなのか、今後検討する必要がある。

本研究は、今後の研究の基礎とするため、長岡高専

生の語彙サイズの現状を把握することのみを主目的としている性質上、今後詳細に検討すべき課題が多く残されている。第1に、被験者を増やし、全学年・全学科を対象に実施し、4年生や5年生の語彙サイズも含め、包括的に調査したい。第2に、より多くの学校に協力してもらい、語彙サイズの差や変化の様子を明らかにしたい。第3に、今後長期的調査をおこない、半年毎、あるいは学年推移による経時的データを収集し、学習者の語彙サイズの変化を調査したい。第4に、本研究では受容語彙に焦点を当て、「その意味を表す語を知っているかどうか」という点を調査した。今後は発表語彙についても調査し、受容語彙と発表語彙との比率や推移について調べてみたい。最後に、学習者が語彙を増やす際には何らかの効果的なストラテジーがあると思われる。今後は効果的な語彙学習法や指導法について研究を深めたい。

語彙力は4技能を伸ばす上で欠かすことのできないものである。生徒の英語学習に対するニーズが何であろうと、また、たとえモチベーションのない学習者であっても、語彙数を増やす必要性については、異論は唱えないだろう。学習者の語彙サイズを的確に把握し、効果的な語彙指導法を構築するために今後も本研究を発展させていきたい。

謝辞:本研究にあたり、調査のために授業時間の一部を提供してくださった本校英語科の先生方に謝意を表します。また、この調査に多大なご協力をいただいた新潟県立新潟商業高等学校関川仁先生に深く感謝申し上げます。

付録

語彙サイズテスト(4000 語レベル)

(望月・相澤・投野.2003:218-9)

日本語の意味を表す英語を(1)~(6)の中から選び、その番号を解答欄に書き入れなさい。

-
- 1 顕微鏡 2 望遠鏡
 (1) cube (2) kilometer (3) license
 (4) microscope (5) studio (6) telescope
-

- 3 化学者 4 消費者
 (1) chemist (2) consumer (3) emperor
 (4) membership (5) sergeant (6) sovereign
-

- 5 交響曲 6 美術館
 (1) charity (2) distribution (3) faculty
 (4) gallery (5) session (6) symphony
-

- 7 認めること・承認 8 祝宴・宴会
 (1) admission (2) bull (3) feast
 (4) geometry (5) hedge (6) succession
-

- 9 つけ値、入札 10 小さな包み
 (1) bid (2) certificate (3) evolution
 (4) lane (5) packet (6) poll
-

- 11 赤道 12 手がかり
 (1) bullet (2) clue (3) equator
 (4) facility (5) lap (6) opponent
-

- 13 船 14 部分、一部
 (1) cereal (2) craft (3) deposit
 (4) pastry (5) portion (6) registration
-

- 15 移行、移り変わり 16 群れ
 (1) complaint (2) cone (3) flock
 (4) leadership (5) temptation (6) transition
-

- 17 どんと突き当てる 18 広くする
 (1) bump (2) confront (3) graduate

(4) promote (5) scan (6) widen

19 促す、刺激する 20 弁解する、嘆願する

(1) arouse (2) clash (3) invade

(4) plead (5) prompt (6) soak

21 仲直りさせる 22 じゃまする、妨げる

(1) conclude (2) hinder (3) murmur

(4) reconcile (5) stagger (6) weave

23 購入する、買う 24 再び始める

(1) alternate (2) collapse (3) fetch

(4) pat (5) purchase (6) resume

25 論理的な 26 中立の

(1) dense (2) logical (3) neutral

(4) partial (5) residential (6) spiritual

27 単数の 28 ことばの、言語の

(1) administrative (2) atomic (3) concrete

(4) frank (5) linguistic (6) singular

29 ただ…だけ、単に 30 徐々に

(1) gradually (2) nearby (3) necessarily

(4) occasionally (5) solely (6) technically

※実際の VST では、選択肢の(1)-(6)は一列に並んで記載されている。なお、他のレベルについては割愛する。

参考文献

- 1) 望月正道: 日本人英語学習者のための語彙サイズテスト, 語学教育研究所紀要, vol.12, pp.27-53, 1998.
- 2) Nation, I.S.P.: *Teaching and learning Vocabulary*. Heinle & Heinle, 1990.
- 3) 望月正道, 相沢一美, 投野由紀夫: 英語語彙の指導マニュアル, 大修館書店, 2003.
- 4) Hatch, E. and Brown, C.: *Vocabulary, Semantics and Language Education*, Cambridge University Press, 1995.
- 5) 投野由紀夫, 編: 英語語彙習得論, 河源社, 1997.

6) 八島等: 日本人高校生の語彙サイズ, 関東甲信越英語教育学会研究紀要, vol.16, pp.29-41, 2002.

7) 中学校学習指導要領, 文部科学省, 1998.

8) 高等学校学習指導要領, 文部科学省, 1999.

9) 八島等: 日本人高校生における推定語彙サイズと「聞くこと」と「読むこと」の力との関係, 関東甲信越英語教育学会研究紀要, vol.19, pp.47-58, 2005.

10) Weir, C. J: *Understanding and Developing Language Tests*, Prentice Hall, 1993.

11) Word Navi 1800, 啓林館, 1999.

12) Word Navi 3300, 啓林館, 2000.

(2005.8.4 受付)